

— 連載 —

## 美術館のある風景 (第7回)

### パブリックアートの展開〈その一〉 —丸の内の街並みとパブリックアート—

三菱地所株式会社 美術館室 恵良 隆二



今回は美術館を離れて街の中へと視点の移します。街で様々なアート作品に出会うことも多くなりました。美しいもの、かわいいもの、不思議なもの、街に新たな発見や魅力を見つめる契機ともなっています。4月の丸の内、仲通りに新緑の季節が訪れます。初夏を迎える頃には、街路は緑の天蓋に覆われます。スーツ姿のビジネスパーソンが木漏れ日に映える彫刻作品に眼をやるシーンも見受けられます。週末のベンチで彫刻や街並みを眺める人も増えてきます。仲通りに彫刻の置かれたのは1972年に始まる「丸の内ストリートギャラリー」以降のこと、そして30年を経た2002年の仲通りの街並み改善で彫刻のあり方も大きく変わりました。今年も約1kmの区間に15の彫刻作品が見られます。土色の斑岩の石畳から立ち上がる高さ2～3mの作品は、歩く人の視線を街路樹へ、そしてカフェやショップの街並みへと導くスケールを意識して選択されています。昨年秋には、彫刻をテーマにしたフォトコンテストも開催されました。約600の応募作品の多くは彫刻と街の風景を切り取り、丸の内の雰囲気伝えてくれました。

そんな仲通りの風景に欠かせない街路樹の変化を少し紹介します。仲通りの街並み改善の際に、歩道を拡幅したことで街路樹の植栽位置を以前より車道から約1mほど離すことができました。結

果、樹木の生育基盤である根鉢が広く確保できたことに加えて、車道の上空に伸びる枝張りは高い位置へと変わり大型車の通行障害も避けられたことで多くの枝の剪定もせず済むようになりました。自然樹形の豊かな緑が生み出された由縁です。街路樹にケヤキ、カツラ、ボダイジュ、アメリカカフウなどの複数樹種を採用することで、樹形も葉の形や色、秋の色づきも異なり、自然の多様性も増すことができました。そんな緑陰の下に、ベンチや鉢の草花と共に彫刻が置かれ、ヒューマンスケールの街並みを形成しています。

また、アート作品をパブリックスペースに置く様々な試みも進んでいます。今年で8回目を迎える「アートアワードトーキョー丸の内2014」(4/26～5/25)もその一つです。全国の美術・芸術の大学・大学院の卒業制作から選抜した約30点の現代アートの作品展示です。場所は、東京駅から皇居へ向かう行幸通りの地下歩行者通路の両側、長さ220mのギャラリースペースです。若い作家の作品を公共空間で展示し、アートとの出会いや若い作家の可能性を広げる試みです。美術作品が街に出ることのできる場所を見出すのも街づくりの手法の一つと言えるでしょう。次回(7月)は横浜の街とアートに触れたいと思います。